オーディオ実験室収載

ZANDEN Model 120 の展開(80)
－ベートーヴェンを聴き直す(15)－

１．始めに

前報(79)に引き続き、これまで聴いてきたベートーヴェンの盤を聴き直していきます。

２．Model 120 設定条件の試聴方法

カートリッジは、My Sonic Signature Gold で、接続に関しては、ZANDEN Model 120 の活用(33)同様、下記のとおりとします。すなわち、アンバランス／バランス変換プラグを用いて BACU-2000 経由で Model120 にバランス入力し、アンプは Langivin 6V6pp を使用しています。

今回も P&G のフェーダーに替えてパッシブアテネーターの TruPhase を使用し、RCA 入力→RCA 出力とします。なお、AACU-1000 は TruPhase の入力側と出力側にセットします。

LINN LP-12→(フォノケーブル)→(アンバランス／バランス変換プラグ)→(BACU-2000) →Model120(バランス入力端子→アンバランス出力端子)→(アンバランスケーブル)→(AACU-1000)→TruPhase→(AACU-1000)→(アンバランスケーブル)→Langevin 6V6pp

なお、LINN LP-12 の再構成(22)で報告しましたように LP-12 の電源を交換し、外付けとしています。また、LP-12 の軸受けをカルーセルに更新しています。

音源としては、これまで聴いてきたベートーヴェンの盤から選んでいきます。

今回は、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 61 を選定しました。

Victor VIC-2056

ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）

ワルデマール・ネルソン指揮モスクワフィルハーモニー管弦楽団

RCA Victor LSC-1992

ヤッシャ・ハイフェッツ（ヴァイオリン）

シャルル・ミュンシュ指揮ボストンシンフォニーオーケストラ

上記は下記で報告しています。

アナログ再構成後の活用(18)

アナログ再構成後の活用(19)

３．Model 120 設定条件の試聴結果

Model 120 の設定は、ZANDEN 社から提供されたリストを参考にして選択していきます。
Victor VIC-2056 のクレーメル盤は、EMI、逆相、第 4 時定数 Low で聴いていきます。クレーメルのヴァイオリンは細身でややぎすぎすしたところがあると思っていましたが、今回の Model 120 の設定条件では、艶のある音で、第一楽章のカデンツアなど、技巧に加えて音楽性の豊かな表情を見せてくれました。オーケストラも少々粗い印象で、古いメロディアの録音だから仕方がないと思っていましたが、今回そういったことは軽減され、膨らみと厚みのある音になっていました。
RCA Victor LSC-1992 盤は、EMI、逆相、第 4 時定数 Low で聴いていきます。
豪快なミュンシュ指揮ボストンと華やかで独特のフレージングもハイフェッツのボウイングが奏でるベートーヴェンです。第一楽章のカデンツアもハイフェッツの華麗な演奏が映えています。

４．まとめ

これまでの試聴同様、前報(24)で報告しましたように ZANDEN Model 120 の導入などの効果があって、上記の曲の演奏のニュアンスがよく表現できるようになりました。

以上